

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	田中 あや
<p>主論文題名 : 「名前の正しさ」と名指しの本性的正しさ ——プラトン『クラテュロス』研究——</p>			
<p>(内容の要旨)</p> <p>対話篇『クラテュロス』は、プラトンの主要な対話篇の一つである。しかし、とりわけ我が国では、この対話篇が正当な扱いを受けてきたとは言いがたい。「名前の正しさ」という聞き慣れない主題と長大な語源分析の扱い難さから、これまで、この対話篇について立ち入った研究はなされてこなかった。英米圏では、20世紀の分析哲学に端を発する「言語論的転回」(linguistic turn)の中で、意味論的関心から『クラテュロス』への注目が高まり、21世紀にかけて、『クラテュロス』研究は飛躍的な発展を遂げた(2011年には、Francesco Ademolloによって、事実上初のコメントリーが出版された)。しかしながら、『クラテュロス』の本質に迫る研究は、まだ存在しない。なぜなら、「名前の正しさ」という主題それ自体が誤解に晒されてきたからである。</p> <p>「名前の正しさ」は、元来、プロディコスとプロタゴラスの二人のソフィストが職業的に扱っていた主題であった。一方で、プロディコスは、『エウテュデモス』277eで、「ひとはまず第一に、名前の正しさについて [περι ὀνομάτων ὀρθότητος] 学ばねばならない」と言ったとされており、それによって彼が、同義語の間に極めて微妙な意味論的区別を設けることを意味していたことは、たとえば『カルミデス』163dや『プロタゴラス』337ac、またアリストテレス『トピカ』112b21-26での言及からも知られる。他方、プロタゴラスは、『パイドロス』267cで、「正語法」[ὀρθόεπεια]を扱っていたとされ、『ソフィスト的論駁について』173b17-174a4や『弁論術』1407b7-8でのアリストテレスの報告、また、『文法学者に対して』(『数学者に対して』第1巻)150-3でのセクストス・エンペイリコスの陳述から、プロタゴラスがそれによって、事物の自然的性質に従って名前の文法的性を分類することを意味していたことがわかる。『クラテュロス』の冒頭部でも、プロディコスとプロタゴラスは「名前の正しさ」に関する類の事柄に精通する人物として言及されるが、高額な授業料をとって講義を行うソフィストたちの慣習があからさまに嘲笑、軽蔑されるだけで、彼らの扱う「名前の正しさ」について、立ち入った考察はなされない。</p> <p>プロディコスらへの皮肉まじりの言及に託された意図は、二つある。その一つは、「名前の正しさ」が、師ソクラテスが精通する類の主題ではないことを最初にはっきりと示しておくためである。実際、ソクラテスは、「名前の正しさ」に関する講義をプロディコスから聞かなかった——がゆえに、「名前の正しさ」に関する事柄の真実を知らないと断言する(384b)。このことは、「名前の正しさ」をめぐるのちの探求が、ソクラテス的基盤に基づいてではなく、ホメロスらの詩人を権威として着手されることの伏線となっている。</p> <p>だがもう一つ、プロディコスらへの冒頭での言及の目的は、この対話篇において論究される「名前の正しさ」が、プロディコスらの扱う類の「名前の正しさ」とは別物——つまり、単に嘲笑するだけでは済まされない、極めて重大な哲学的問題を孕むもの——であることを示唆することにある。問題とされるその「名前の正しさ」は、クラテュロスという名の人物が説くものであり、</p>			

この人物に極めて特異な、私秘的思想である。クラテュロスは、ソクラテスの仲間の一人であるヘルモゲネスに対し、「少なくとも「ヘルモゲネス」は君の名前ではない——たとえすべての人間がそう呼ぶとしても、だ。」(383b6-7)と謎めいた発言をするが、その理由をヘルモゲネスが問いただしても、しらばくれて何も明確にしない。そこでヘルモゲネスは、偶然通りかかったソクラテスに、クラテュロスの「神託めいた言葉」の「解釈」を願い出る。この対話篇のほぼ半分を占める長大な語源分析は、したがって、クラテュロスが「名前の正しさ」と呼ぶものについてのソクラテスの解釈なのである。

以上の二点を踏まえると、プロディコスらソフィストたちについての挿話を通じて、プラトンは、「名前の正しさ」に関する事柄の中に、ソクラテス（そしてプラトン）によって積極的に肯定されうるものは何もないこと、そしてクラテュロスの説く「名前の正しさ」が何故「問題」であるのかが、徹底的に吟味されねばならないことを暗示していると考えられる。クラテュロスが「名前の正しさ」と呼ぶものの中にプラトンが見据えた「問題」とは、それが、「名前の語源分析から得られる「記述的意味」が、対象の本性を明示する」と主張する点にある。この主張は、意味論的にも存在論的にも、極めて重大な哲学的問題を孕む。一方で、それは、「語は、その記述的意味を充足する本性をもつ対象にしか適用され得ない」と主張することによって、「虚偽の発語の不可能性」を伴い、他方、「語の記述的意味を知ることが、対象についての知識を獲得する唯一にして最善の手段である」と主張することによって、記述的意味を無条件に基準として、外的世界のあり方を断定する。

ソクラテスは、語源分析を実演する過程で、名前が「正しい」名前であるための条件を、それが対象の任意の属性を表示するという点に見出す。極めて重要なのは、ここにおいてはじめて、語と対象との間に第三の要素——われわれが「意味」や「概念」と呼ぶもの——が出現したことである。しかし、語が表示するものは、厳密には、複数の語の記述的意味が共通に表示するもの（たとえば、“Ἐκτορ”と‘Ἄστύναξις’は、それぞれの記述的意味——「所有者」と「市」[ἄστυ]の「支配者」[ἄναξις]——を介して、同一の属性——“王にふさわしい”——を表示する）として——それはつまり、いわば記述的意味によって決定されるものとして——現われたため、対象の本性では決してなく、むしろ当の対象にとり付随的な属性であったり、実際には当の対象にあてはまらない属性である可能性がある。取り違えてはならないのは、ソクラテスが見出したこの語源分析的方法論それ自体が誤りなのではないということだ。問題は、語と対象との間に「意味」を介在させることではなく、むしろ、それを対象の自然本性的あり方と混同することにある。

「名前の正しさ」は、それが「対象の本性を明示する」と主張する限りにおいて、徹底的に批判・吟味され、斥けられねばならない。しかし、従来の『クラテュロス』研究において、この対話篇の冒頭部が適切に読まれてこなかったがゆえに、「名前の正しさ」は、ソクラテス（そしてプラトン）の受容する見解と見做されてきた。「名前の正しさ」一般がソクラテスによって積極的に論じられうる主題ではないこと、そしてこの対話篇で論究される「名前の正しさ」がクラテュロスという人物に特異な、極めて問題含みの思想であることが看過され、それは「言語本性主義」対「言語規約主義」という一定の学説ないし理論間の対立において論じられてきた。これまで、このテキストに明記されていない前提が疑われることすらなかったために、「名前の正しさ」に対するプラトンの最終的立場やこの対話篇の一貫性などをめぐるとの不要な論争が引き起こされてきた。

上記の背景と問題点を踏まえ、本稿は、この対話篇全体の目的が、クラテュロスという名の登場人物の説く「名前の正しさ」に孕まれる「問題」を批判・吟味することにあるという想定に立ち、この対話篇が、或る種の循環構造を成して、語と対象との関係をめぐるとの完結した議論

を構成しうることを示す。それに先立ち、第一章は、『クラテュロス』を読解するための予備的考察に当てる。この章は、『クラテュロス』の全体像とその本質を捉え直すうえで再検討されるべき四つの項目——冒頭部の見直し（第一節・第二節）、語源分析（第三節）、クラテュロスと「名前の正しさ」（第四節）、執筆順序の問題（第五節）——を扱う。具体的には、まず、従来の『クラテュロス』研究において共有されてきた基本構図の問題点を指摘し（第一節）、これまで精確に読まれてこなかった冒頭の一節およびその背景にある事情を正しく理解し直すことによって、従来の基本構図の全面的見直しを図る（第二節）。次に、この対話篇のほぼ半分を占める長大な語源分析が、対話篇全体においてどのような役割を担っているのかを検討する（第三節）。途方もない量の語源分析の存在は、『クラテュロス』研究の進展を妨げる一つの要因となってきた。Barney の研究 (2001) は、語源分析の機能、長さ、そしてユーモア的要素を正しく理解するうえで不可欠な「プラトンのジャンル」（プラトン流の書き方）という視点を導入し、『クラテュロス』の語源分析研究に一定の指針を与えたが、同時に、プラトン哲学における価値という論点を問題化した。以後、語源分析の裏にある哲学的問題（流転説をめぐる問題）が議論の俎上に載せられ、表の問題——すなわち、ソクラテスの語源分析のパフォーマンスそれ自体が示している問題——が見過ごされてきた。本稿は、「エウテュプロンの知恵」と「自己欺瞞」という二つのモチーフに着目し、ソクラテスの語源分析の実演が全体として、次のことを示していることを論証する。それはすなわち、知識への探求的欲望ではなく誇示的欲望から語源分析に魅了され、名前の中に反映された古代の命名者たちの見解を知ることによって知識を得たと思いついでいることの無自覚と自覚の間の緊張関係、である。われわれは、語の使い手として、語の外部にある対象——実在——をある仕方では把握しているにもかかわらず、知識というものが外から与えられるものであるという誤った理解をもつがゆえに、何であれ権威的で言語化されたもの（語源分析的知識もその一つ）に確からしさを見出し、それで知識を得たと思いついでいる——このことは、『クラテュロス』全体が提示する「問題」である。それゆえ、ソクラテスの語源分析の実演は、まさに『クラテュロス』の中心的問題と直接的にかかわっているのである。

Goldschmidt の研究 (1940) が明らかにしたように、語源分析は、外的世界がいかにあるかを教える説得的で有効な手段として当時ソフィストたちの間で重んじられていた。他方、前述のように、「名前の正しさ」もまた、プロディコスやプロタゴラスらの一部のソフィストたちによって職業的に扱われていた。クラテュロスという人物が、語源分析に職業的に従事していたソフィストの一人であったかどうかは定かでないが、この人物に特異な点は、「名前の正しさ」を語源分析的基準に求めたことと、その「極端性」にある。『形而上学』（第1巻第6章 987a29-b7; 第4巻第5章 1010a7-9）でのアリストテレスの証言から、クラテュロスは、通常、極端な流転説を唱え、最後には語ることを放棄した人物として知られるが、その極端性は、彼の説く「名前の正しさ」と無縁ではない——否むしろ、「名前の正しさ」への異常なまでの執着が、クラテュロスを、最終的に言語を放棄するにまで至らせたと考えることは妥当である。第四節では、「言語の放棄」に存するクラテュロスの流転説の極端性が、彼が「名前の正しさ」と呼ぶものの極端性にいかなる仕方では起因するかを検討する。その考察のいくらかは推測の域を出ないが、クラテュロスという人物の哲学的発展を可能な限り再構築しようと試みることは、なぜプラトンがこの『クラテュロス』という対話篇において、クラテュロスの説く「名前の正しさ」を問題化したのかを理解するのに役立つ。

『クラテュロス』の十全な理解のためにもう一つ検討されねばならない問題がある。それは、『クラテュロス』の執筆順序をめぐる問題である。一般に、『クラテュロス』は中期対話篇と見做されているが、中期対話篇のどこに位置づけられるかという問題がこれまで議論を呼んできた。結論から言えば、本稿は、『クラテュロス』を『国家』以後に位置づけ、この対話篇を『テ

アイテトス』を経て『ソフィスト』へと連結する三部作の序章として読むという Warburg らの解釈に従う。その論拠の一つが、385b2-d1 の一節にある。この一節は、現在置かれている場所にはふさわしくなく、それゆえ、別の場所に置き換えられるか、あるいは削除されねばならないという見方が、現在、主流となっている。この一節は、「言表」を「名前」と同化するという統語論的問題を抱えており、『クラテュロス』の執筆順序を特定するうえでの一つの指標となりうるため、その取扱いは慎重になされなければならない。Sedley の研究以前、この一節は、『クラテュロス』の執筆順序をめぐる問題とは無関係に論じられてきたが、Sedley の研究によって、双方が密接な関連をもち、それゆえ、独立に論じられるべきでないことが示されたと思われる。したがって、第五節は、その大部分が、この一節と、それとの関連が見込まれる 429b10-430a7 の一節についての詳細な分析に当てられる。この作業は、『クラテュロス』の執筆順序をめぐる問題に取り組むうえで必要不可欠な作業であることを、予め断っておきたい。

第二章では、従来、「言語本性主義」を擁護する議論と見做されてきた 384c10-391b6 の一節が、名指しの本性的正しさを基盤とするプラトンの言語論の提示に位置づけられることを示す。この対話篇は、「名前の正しさ」のようなものは存在しないと主張するヘルモゲネスの見解の吟味からはじまる。従来、名前の本性的正しさへの移行は、ヘルモゲネスの「言語規約主義」の論駁の結果と見做されてきたが、それは実際には、ヘルモゲネスの見解の内的展開の結果である。ソクラテスは、「各人が何かにつけた名前であればなんでも、各人にとっての名前である」というヘルモゲネスの見解から、名前の、各命名者に対する「相対性」という特徴を見出す（第二節）。そして、名前が各命名者に対して相対的であるのと同じように、名指される対象のあり方もまた、各人に対して相対的であるのかどうかをヘルモゲネスに問うことによって、ヘルモゲネスに、これまで不明瞭であった二種類の相対性——すなわち、「名前（厳密には、文字と音節から構成される素材としての名前）の、各命名者に対する相対性」とプロタゴラスの「認識される対象の、各認識主体に対する相対性」——の峻別を促す。その峻別をもってはじめて、名指される対象の同一性が顕在化する。このようにして、議論は、「名前の正しさ」の存在それ自体を認めないヘルモゲネスの見解から、プロタゴラスの「相対性」の否定を媒介として、名指される対象の「確固不動性」へと内的に展開してゆくのである（第三節）。ヘルモゲネスの見解を吟味してゆく中で見出される名前の本性的正しさは、したがって、クラテュロスの主張する「名前の正しさ」と同じものではない。

音声形態としての名前の「相対性」から、名指される対象の「確固不動性」が要請されたことの背景には、「名指す」という行為を、外的世界のあり方にかかわる営みであるとするプラトンの理解が存在する。たとえば肉を切ろうとするとき、切られる対象（肉）のあり方（肉の種類や部位別特性など）を考慮せず、行き当たりばったりの道具を用いて切ろうとするなら、その肉を切るという行為は失敗に終わるだろう。だが、実際には、われわれは、明示的な仕方で誰かに教えられたわけでもなく、明示的な規則に従っているわけでもないのに、切られる肉の特性に適した仕方で、本性上適した道具（肉切り包丁のうちでも、切られる肉の特性に適したもの）を用いて切ることができる。同様に、名指すという行為においても、われわれは、明示的な仕方で誰かに教えられたわけでもなく、明示的な言語規則に従っているわけでもないのに、名指される対象のあり方に即して、本性上適した道具（名前）を用いて名指すことができる。ここで留意しなければならないのは、われわれの行為の成功は、行為主体の専門的な知識や技術よりも道具の性能に依拠するという点である。概して、われわれは、肉についての専門的な知識や肉切りの専門的な技術を持っていないが、肉切り包丁を使えば、少なくとも、肉を切るという行為には成功する。同様に、われわれは、対象についての専門的な知識や対象同定についての正確な理解を欠いているが、適切な名前を使用することで、少なくとも、名指すという行為には成功する。「道具の機能

への依存性」という論点は、われわれが、名指すという行為を、それがなされるにふさわしい仕方
方で実際になしているという事実¹に無自覚であること、そして、名指される対象について暗黙の
裡にもっているある種の「知」がまだ不完全なものでしかないことを示唆する（第四節）。

こうした「名前の道具モデル」を支えているのは「名前の形相」という概念である。「名前の
形相」を名前の「意味」や「概念」と見做す通常の解釈の誤りは、384c10-391b6（この一節は、
名指すという行為の本性的正しさにかかわる）と、後続する391b7から427e5までの一連の長い
語源分析のセクション（この箇所は、クラテュロスの説く「名前の正しさ」についてのソクラテ
スの「解釈」にかかわる）との間の根本的な相違を看過し、後方で導入される「名前の力」とい
う概念と「名前の形相」とを混同したことにある。語源分析の過程で見出される「名前の力」は、
語がその記述的意味を介して対象の任意の属性を表示する作用——意味作用——に相当するが、
「名前の形相」は、語と対象との間の自然本性的な指示関係の言語モデルの構築の際に導入され
た概念であるため、「意味作用」ではあり得ない。「名前の形相」を理解する鍵は、それが「名
指す」ということを、その自然本性としている何かである」と言われる点にある。そうすると、
「名前の形相」とは、一方で、「名指すこと」——「実在の区分と教示」——をその自然本性と
する機能であるが、他方、名前は、それが道具である限りにおいて、使用されることによっ
てはじめてその機能を発揮しうるため、実際には、われわれ語の使い手が、名指すという行為
を通じて、実在の区分と教示を体現していることになる。名指しの成立が、名前それ自身の
自然本性的機能と、名前の正しい使用との間の相互依存関係に依拠することは、語の使い手が、
名指すという行為を、それがなされるにふさわしい仕方²で実際になしているという事実³に無自覚であること
と、名指される対象について暗黙の裡にもっているある種の「知」がまだ不完全なものでし
かないことを示唆する（第四節）。

名前の模範的使用者たる「問答家」への言及は、名前使用が、プラトンにおいて、問答法にお
ける使用を射程に収めるものであることを意味する。われわれ日常の名前使用者と問答家との間
に設けられた区別は、名指すという行為のあり方そのものにかかわるのではなく、外的世界のあ
り方を基準として、語の適用の正しさを識別できるか否かという点に存する。このようにして、
プラトンは、語と対象の二項関係に限定された言語モデルが、語・語を使用する主体の知のあり
方・対象の三項関係に拡張されねばならないことを、示唆しているのである（第五節）。

第三章は、391b7から、クラテュロスが再度登場する427e5までの一連の長い語源分析が、ク
ラテュロスが「名前の正しさ」と呼ぶものについてのソクラテスの「解釈」であることを示す。
このことが意味するのは、ソクラテスが提示する語源分析的方法論およびそれによって示される
内容が、クラテュロスが「名前の正しさ」ということ⁴で言おうとしていることではないというこ
とである。クラテュロス自身の口から「名前の正しさ」の内実が語られるのは、427e5以降であ
る。ソクラテスはこの対話篇において、「名前の正しさ」に関する事柄の真実を知らないという
姿勢に徹しており、対話相手であるヘルモゲネスもまた、「名前の正しさ」について無知である
——否むしろ、彼は「名前の正しさ」の存在それ自体を認めない——ため、「名前の正しさ」を
めぐるソクラテスらの探求は、「知っているひとびと」を頼りに行われることになる。「知っ
ているひとびと」とは、プロディコスとプロタゴラスであるが、一方で、プロディコスに関して
は、「彼の講義をソクラテスは聞かなかった」とすでに言われており、他方、プロタゴラスに関
しては、ヘルモゲネスが、プロタゴラスの相対主義を斥けたことを理由に「名前の正しさ」につ
いての説も否定するため、彼らソフィストに代わって「ホメロスらの詩人」が権威となる（第二節(1)）。

「名前の正しさ」についてのソクラテス「解釈」は、大まかに、次の三つの段階から構成され
る。

第一段階：同じもの（子）につけられた二つの名前のうち、どちらがより正しい名前であるかを
決定するのは、名前の使用者の間の知恵の優劣である（ホメロスの説明）。

第二段階：同じもの（子）につけられた二つの名前のうち、一方がもう一方よりも正しい名前であることは、原則 P*——子と親は、自然本性的上、同一の種に属する、あるいは同一の属性を有する——に従い、その一方の（子の）名前と親の名前とが、それぞれの記述的意味を介して、同一の属性を表示するという点に存する。

第三段階：複数の名前の中の正しさは、それらが、それぞれの記述的意味を介して、同一のものを意味論的に表示するという点に存する。

この三段階の説明において、父子関係にある二つの名前に適用された「自然本性的正しさ」の説明が、「複数の名前の中の意味論的正しさ」の説明へと拡張・展開されている。以後、一連の長大な語源分析によって、実際のギリシア語の名前の記述的意味が、全体として、実在の本性を“動”と表示することが示され、この対話篇の最後の議論では、それが意味論的ではなく存在論的に真であるのか否かが検証されることになる。したがって、ホメロスの、自然本性的正しさの説明から、意味論的正しさの説明への拡張および展開は、こののちの議論展開の極めて重要な伏線となっているとすることができる。

第四章は、クラテュロスが「名前の正しさ」と呼ぶものに孕まれる意味論的問題を扱う。ソクラテスは、一連の語源分析の実演を通じて、派生的名前の「正しさ」を「記述的意味を介して対象の任意の属性を表示する」という点に見出し、他方、要素的名前の「正しさ」を「字母と対象との間の音声的類似性」という点に見出した。しかし、これらの説明は、クラテュロスが「名前の正しさ」と呼ぶものの内実を明らかにしない。ソクラテスの説明に関して、クラテュロスが納得しない点は、それが、「諸々の名前の中の出来の優劣における差」（言い換えれば、「正しさの程度の差」）を主張する点である。クラテュロスによれば、すべての名前が正しくつけられているため、「正しさ」に程度という性質は認められない。これまで見てきたように、ソクラテスが提示した「正しさ」の条件は、極めて弱いものであった。なぜなら、語が何を表示するかは、語の記述的意味によって決定されるため、語が表示するものが対象の本性である必然性は全くないからだ。実際、ソクラテスが語源分析した名前のほとんどが、対象の付随的な属性か、実際には当の対象にあてはまらない属性を表示する。つまり、ソクラテスが扱った名前のほとんどが、出来の悪い名前なのである。

そうすると、「すべての名前が正しくつけられている」という主張でもってクラテュロスが言わんとするのは、「すべての名前が、その記述的意味を介して、対象の本性を表示する」ということであることになる。この主張は、意味論的問題を孕む。この主張に従えば、「語は、その記述的意味を充足する本性をもつ対象にしか適用され得ない」（「記述的意味＝指示対象説」）ため、虚偽を発することが、本来的に不可能になるからだ。たとえば、誰かがヘルモゲネスを「ヘルモゲネス」と呼ぶ際、この名前は、話し手の意図に関係なく、その記述的意味——「ヘルメスの息子」——を充足する本性をもつだれか別の人物を指示する。結果として、この話し手は、「ヘルモゲネス」という発語でもって、そのだれか見知らぬ人物を正しく名指していることになる（第一節(1)）。あるいは、挨拶の場で相手の名前を間違えるといった事例では、間違って発せられた語は「騒音」に過ぎない(2)。ソクラテスは、身振りや記述などの名前以外の要素に訴えることで、話題となっている対象が特定されるメカニズムを説明し、虚偽を発する可能性を示そうとする(2・(3))。しかし、語が対象を指示するメカニズムが記述的意味によっては説明され得ない——言い換えれば、指示を確保する要因は、記述的意味ではない——ことが示されない限り、「記述的意味＝指示対象説」は論駁され得ない。

そこで、ソクラテスは、クラテュロス説の誤りの元凶が、「似像」と「写し」の混同にあることを看守する。似像も写しも、実物とは別のものであるという点は共有しているのだが、似像は

二通りの仕方で写しとは異なる。第一に、似像は、たとえば二次元であったり、木製であったり、無生命であったりといった類の「本質的」欠陥をもつ。第二に、似像は、制作者の技量や能力次第で、実物が実際に有するのとは異なった諸特徴を与えられる場合がある（「非本質的」欠陥をもつ）。名前はこれらの欠陥をもつ「似像」であって、実物と質的に同一な「写し」とは異なることを示したうえで（第二節）、ソクラテスは、要素的名前である‘σκληρότης’「硬さ」を取り上げる。この名前は、中に置かれたλが硬さとは正反対の柔らかさを模倣するため、「出来の悪い名前」に数え入れられる。これまでの議論は、指示が名前以外の要素（直示など）に依拠しなければ成立しないという点に重点を置いていたため、「記述的意味＝指示対象説」を論駁するに至っていない。そこでソクラテスは、σκληρότηςが名前以外の要素抜きで、いかにして当の対象——〈硬さ〉——を指示しうるかを問題にする。この問題化によってソクラテスは、指示を確保する要因として、クラテュロスから「習慣」[ἔθος] という要素を引き出すことに成功する。ここで言われる「習慣」とは、「こう発語する」という発語行為と「あれのことを考える」という思考活動の習慣的な連鎖であり、この連鎖は、或る言語共同体の言語規則を採用して以来、その規則の範囲内で言語を使用するよう自分自身を習慣づけてきたことに由来する。だが、「発語行為と思考の習慣的連鎖」は、「自分自身と結んだ規約」の上に成立している。「自分自身と結んだ規約」という考えは、プラトンにおいて、語の使い手が対象についての知識を或る仕方でもっていることを説明する。なぜなら、「名前は、規約を結んだことによって対象を前もって知っているひとびとに対して、{その対象を} 明示する」と言われるからだ。Ademolloによれば、「対象を知っている」とはここでは、「「X」がどんな対象を指示するかを知っている」ということを意味する。つまり、語の使い手は、「X」という記号ないし音声とXを結びつける作業を行ったことにより、Xを——おそらくは、暗黙の裡に——知っているのである。しかし、名指しの成功が、同じ言語共同体に属する他者の理解にいくらか依拠する限りにおいて、語の使い手が対象についても持っている知識が問い直されることはない(1)。

しかし、ソクラテスにとって（以上のような意味での）「規約」だけが指示を確保する要因ではない。ソクラテスは、指示を確保する要因を「規約」と「類似性」の両方に見出す。ここで問題となるのは、名前を構成する字母と対象との間の音声的類似性が、いかにして指示の成功に寄与するか、である。要素的名前が正しい名前であるための語源分析的条件として導入された「類似性」が、実在を構成する類と、それと対応する仕方で取り出された字母との間の関係に言及する点と、「形跡」[τύπος] という概念に着目し、本稿は次のような解釈を提示する。語の使い手は、何か或る「X」という記号ないし音声とXを結びつける作業を行ったとき、Xが「X」という視覚的記号ないし音声としてそのひとの精神に刻印され、のちに「X」という記号ないし音声に遭遇したとき、その視覚的記号ないし音声からXを喚起することで、それがXの名前であることを認知することができる。もしこの考えが正しければ、語と対象との間の音声的類似性は、規約に依拠する仕方で、指示の成立に関与していることになる(2)。以上のようにして、ソクラテスは、語が使用される外的文脈に訴えることなしに、語それ自体が当の対象をいかにして指示しうるかを、「規約」と「類似性」という二つの要素を用いて説明した。しかし、以上の説明は、‘σκληρότης’という要素的名前に関するものであるため、「記述的意味」が指示の成立に寄与し得ないことを論証するものではない。したがって、クラテュロスの「記述的意味＝指示対象説」は、いまだ無傷のままであることになる。

第五章は、クラテュロスが「名前の正しさ」と呼ぶものに孕まれる存在論的問題を扱う。

「すべての名前が、その記述的意味を介して、対象の本性を表示する」というクラテュロスの主張は、意味論的問題のみならず存在論的問題をも孕んでいる。「語の記述的意味が、対象につい

ての知識を獲得する唯一にして最善の方法である」（「記述的意味＝知識説」）と主張することによって、語の記述的意味を無条件に基準として、外的世界のあり方を断定するからだ。ソクラテスは、「記述的意味＝知識説」を、実際のギリシア語は一貫性を欠いていることを示すことによって論駁しようとするが、クラテュロスは、再度「記述的意味＝指示対象説」を持ち出して、語源的に「動」を表示する名前と「静」を表示する名前のどちらか一方は名前ではないと主張する。だが、そのことは、どちらの名前が存在論的に真の理論を提示するかを判定する別の方法を要請することになるため、語の記述的意味を、対象についての知識を獲得する唯一にして最善の手段と見做す「記述的意味＝知識説」は論駁されたかに見える。しかし、この一連の議論の結論は、名前を通じて実在について学ぶことの或る程度の可能性を残すものであるため、「記述的意味＝知識説」の全面的な論駁には至っていない。

第六章は、プラトン哲学と流転説の問題を扱う。まず第一節で、先行研究の問題点を指摘し(1)、この問題に取り組むうえでの予備的考察を行う(2)・(3)。第二節では、『クラテュロス』の最後の議論である「流転をめぐる議論」を検討する。この議論は、「万物は常にあらゆる点で流転している」という「極端な」流転説のテシス(Hテシスと略記する)から何が帰結するかを見ることによって、あるもののそれぞれ一つ一つの「確固不動性」(数的・質的同一性)を主張するソクラテスのテシスの正否を検証しようという試みとして読まれる。この議論は、Hテシスから導出される四つの帰結を論ずる四段階の議論から成る。この議論の結論は、極端な流転説の真偽性についての判定を留保するものではある。しかし、名指され、知られる対象の本性が流転ではあり得ないことは、「記述的意味＝指示対象説」と「記述的意味＝知識説」がそれぞれ自己論駁に追いやられるという仕方で暗示されている。もし名指され、知られる対象の本性が——記述的意味が主張する通りに——“動”であり、それぞれのものは片時も同一性を保たないのなら、名前の記述的意味は、その機能——指示対象を決定するという機能と、対象についての知識を提供するという機能——を失うことになる。なぜなら、一つの名前が、その記述的意味を介して一つの特定の対象(本性的指示対象)をもつことは不可能になるからだ。つまり、クラテュロスの「名前の正しさ」と極端な流転説は、本質的に、両立不可能であり、もしクラテュロスが極端な流転説を擁護するなら、彼は「名前の正しさ」を捨てざるを得ないのである。

以上のようにして、『クラテュロス』は、名指し行為の成功が依拠するところの、名指される対象の「確固不動性」の仮定ではじまり、その仮定で終わるという或る種の循環構造をなして、語と対象との関係をめぐると一つの完結した議論を構成する。

Given that Cratylus' theory of the correctness of names is semantically and ontologically unacceptable to Plato, the principal purpose of the *Cratylus* must be to subject the theory as a whole to close scrutiny and harsh criticism. Only from this perspective on the main theme of the dialogue, 'the correctness of names', does the whole picture of the *Cratylus* appear to us.